2014年3月31日発行

日本教育大学協会全国美術部門

会　報 NO.46

編集・発行　大学美術教育学会総務局広報室
理 事 長　大嶋　彰（滋賀大学）
総務局長　相田隆司（東京学芸大学）
事務部長　佐藤聡史
事 務 部　〒389-0406　長野県東御市八重原2912
TEL：090-2560-5998 /FAX: 0268-61-6162
mail: daibibumon@po15.ueda.ne.jp

美術教員養成と学校現場経験

美術部門副代表（正）山口喜雄（宇都宮大学）

教員養成大学・学部は2013年度にミッションの再定義が求められた。各大学・学部は、2021（平成33）年度末までに卒業生の教員就職率の向上と共に、各大学教員の学校現場教員比を約10%増とすると自己決定した。

筆者の狭い学校現場経験であるが、本稿で具体例を示し、その意味を考えてみたい。教員は外的課題と内的課題の狭間で職務を果たしている。大学教員と学校現場教員との大きな差異は専門性と独創性に裏打ちされた内的課題の質の高さと更新の持続性にある。職位の更新に際し、それが不可欠でもある。大学教員の外的課題とは、年度ごとに自己評価の提出が求められる研究業績・学部運営・授業評価・地域連携・資金獲得などである。

一方、学校現場教員の外的課題は教科学習指導の他にも校務分掌・学級経営・行事運営・生徒指導・PTAなどの校内諸活動、さらに市県・地区・全国規模の研修会・大会への参加や企画・準備・実施を担うことである。

前任の筑波大学附属小学校の学級担任は朝8時から学級遊び指導があり、朝の会・集金業務・昼食指導・清掃指導・安全指導などが連綿と続く。年2回の公開授業研究会と雑誌『教育研究』執筆、校務分掌、遠足・清里での宿泊指導・運動会、農園での種付けと収穫、保護者会や個人面談など枚挙にいとまがない。担任学級では図画工作と国語・算数ほか、出授業の図画工作3学級や生活科・書き方・読書を担当した。うち専門の図画工作授業は、空時間を除く週授業総時数の三分の一程度であった。受験学習に傾斜した児童は用意された「答えに合わせようとする知覚習慣」が強化され続けている。そのため、児童の「自己決定と自分らしさ」の形成を内的課題とし、図画工作の授業実践と研究のコアに位置づけた。

それ以前は千名規模の横浜市立中学校3校に19年間勤務し、うち2校は問題行動多発校であった。話に聞くより実情は厳しかった。教員の半数以上が暴力を被り、暴力を振るわれて怪我をした若い女性教員の父親が校長に抗議しに来るほどで、通勤拒否の教員が複数いた。毎日5、6回も非常ベルを作動され、生徒にも教員にも不安な日々であった。学年会で創意を出し合い、様々な実践をした。学習小委員会を創設し生徒自らに問題を作成させ、学年全体で朝自習を行えるようにした。毎週の学年会にて集中的に励ます生徒数名を決め、全教員が声をかけた。学年全体が少しずつ明るさを取り戻した。校内相互の授業研究を毎月行うと、やる気を示す生徒が増え、授業中の荒れが減少した。合唱音楽会・体育大会・芸術鑑賞会を盛り上げ、保護者会で問題行動の実態と協力を伝え、問題行動ゼロの学年づくりを具現できた。自ら感じ・考え・決定し、責任ある行動をする生徒を培うため自我形成の美術授業実践を展開した。それらを基に雑誌執筆、年間4件の学会発表、学会等論文の執筆を行った。校内では教務副主任・学年副主任、横浜市の中学校美術教育研究会研究部長を兼務したおかげで多忙だったが、外的課題と内的課題が統合されて取り組むことができた。

上記は約17年以前の話で校内暴力やいじめはあったが、モンスターペアレント現象は一般化していなかった。筆者の子ども期には都市部でも野山にて異年齢子ども集団での遊びがあった。40年以上前に教員養成学部で筆者が受けた授業は一般的な内容であったが、子ども期からの多様な人間関係が教育実践の支えになった。けれども、現在の学生たちは農村部でさえテレビゲームの仮想空間での遊びの中で育ち、人間関係は希薄と推定される。そうした学生には具体的な体験と教育実践の見通しが理解できる教員養成の授業内容が必要不可欠と考えた。専門科目は従前の受講生自らの専門性の獲得と向上だけでなく、教育実習の際に児童・生徒一人一人の発達状況や学校・学年状況に応じた専門分野の学習指導に関する具体的な指導法を体験的に学ばせたい。筆者は教員養成の図画工作授業の初回に教室入室の際の表情やことば使いを演じて見せる。そして、図画工作学習の意義や評価の観点の児童への伝え方を考えさせる。美術科教育法では、制作指導のロールプレイを教員役と生徒役で行い、相互に学生作品の評価・評定も行う。児童・生徒の気持ちの追体験学習は、教育実習だけでなく教員採用後の支えになったと卒業生から手紙をもらったこともある。教員養成では、学校現場経験の反映が外的課題の現在である。

■平成 25 年度
日本教育大学協会全国美術部門
「京都大会」報告

1．日時:2013 年 10 月 11 日 (金) 諸会議、12 日 (土) 部門総会・協議会、13 日
2．会場 : 京都教育大学　F 棟（共通講義棟)、A 棟、C 棟（所在地 : 京都市伏見区深草藤森町）
3．大会実行委員長　京都教育大学　村田利裕

＜大会日程等＞

【大会前日の諸会議】

2013 年 10 月 11 日 (金)　各委員会、役員会

13:00-13:30	拡大総務局会議
13:30-14:20	全造連大学委員会【部門】 ※全国大学造形美術教育連絡協議会（年 1 回の美術部門全造連大学委員と全美協の懇談会）
14:20-15:20 ※審議延長（15:20-17:00）は可	国際交流委員会【学会】 学会誌委員会【学会】 附属学校委員会【部門】 特別課題検討委員会【部門】 (全美協　役員会）【私学】
15:10-15:30	拡大理事会受付【学会・部門共通】
15:30-16:30	拡大理事会【学会＋部門（共通審議事項を含む)】
16:30-17:10	美術部門協議役員会【部門】

【京都大会第 1 日】

2013 年 10 月 12 日（土）F 棟（共通講義棟)、A 棟

9:00-	学会・部門受付	F 棟入口
9:30 -11:00	日本教育大学協会全国美術部門開会式、総会、協議会	F 棟 大講義室Ⅱ
11:00 -11:25	第 52 回大学美術教育学会全国大会開会式	F 棟 大講義室Ⅱ
11:30 -11:57	口頭発表	F 棟 F12,F16 F22,F26 A 棟共通室 1A1
12:00 -13:00	昼休憩	
13:00 -15:37	口頭発表	F 棟 F12,F16 F22,F26 A 棟共通室 1A1
16:10 -17:30	シンポジウム「ひと」「感性」「表現」の可能性＜私の提言＞	F 棟大講義室Ⅱ
17:30 -19:00	懇親会場へ移動	
19:00 -21:00	懇親会	京都タワーホテル

【京都大会第 2 日】

2013 年 10 月 13 日（日）F 棟（共通講義棟)、A 棟

9:30-	受付	F 棟入口
10:00 -11:57	口頭発表	F 棟
12:00 -13:00	昼休憩	
13:00 -13:25	ポスター発表	A 棟 A1,A3 教室
13:30 -14:57	口頭発表	F 棟
15:10 -15:40	大学美術教育学会総会	F 棟 大講義室Ⅱ
15:50-	引き継ぎ（大会運営理事 H 25 京都教育大学・H 26 福井大学）	

※大会期間中、併設企画として下記の行事を開催した。

・『一麦寮　色とかたち展 - 素材がうたう -』
　場所 : 京都教育大学附属図書館企画展示室

・『全国美術教育学生会議』
　各大学から参加した学生が美術教育についての議論を通して交流を深めます。（12 日 13:00-16:00　会場 : C 1）

▲部門協議会のようす

■平成 24 年度決算

収入

費目	平成 24 年度決算	平成 24 年度決算	増減
前年度繰越	318,201	318,201	0
会費収入	990,000	882,000	-108,000
未納会費	240,000	195,000	-45,000
教大協助成金	80,000	80,000	0
収入合計	1,628,201	1,475,201	-153,000

支出

支出	平成 24 年度決算	平成 24 年度決算	増減
全国協議会補助金	200,000	200,000	0
全造連負担金	4,000	4,000	0
部門会報通信刊行費	100,000	84,000	-16,000
名簿刊行費	0	0	0
封筒その他印刷費	30,000	0	-30,000
教科内容学検討委報告書	200,000	134,000	-66,000
特別課題検討委員会費	200,000	93,900	-106,100
支払手数料	5,000	1,260	-3,740
通信費	5,000	5,000	0
郵送費	50,000	0	-50,000
事務費	5,000	0	-5,000
雑費	5,000	0	-5,000
事務部業務委託費	100,000	36,000	-64,000
予備費	724,201	917,041	192,840
合計	1,628,201	1,475,201	

日本教育大学協会全国美術部門

代表　大嶋　彰　様

平成 24 年度日本教育大学協会全国美術部門の会計について、
平成 25 年 9 月 12 日　監査委員会を開催し、会計監査を実施した結果、

1. 収支について伝票類と帳簿類を対照監査した結果、それらが正確に仕訳、記帳されていました。
2. 収支の伝票類と帳簿類は整理され、収支の内容・使途も明確に記帳され、会計が適切に処理されていました。
3. 帳簿差引残高及び貯金・現金残高と決算書との対照も行いましたが、正確であることを確認しました。

以上のごとく、平成 24 年度会計の処理及び決算が正確に執行されていたことを報告いたします。

平成 25 年 9 月 12 日

日本教育大学協会全国美術部門

監事　小澤基弘

監事　増田金吾

■平成 25 年度予算

収入

費目	平成 24 年度予算	平成 25 年度予算	増減
前年度繰越	318,201	917,041	598,840
会費収入※1	990,000	930,000	-60,000
未納会費※2	240,000		-240,000
教大協助成金	80,000	80,000	0
収入合計	1,628,201	1,927,041	298,840

※1　会費収入＝@3,000 円× 310 名
※2　未納会費件数は減少したため本年度は費目立てなし

支出

費目	平成 24 年度予算	平成 25 年度予算	増減
全国協議会補助金	200,000	200,000	0
全造連負担金	4,000	4,000	0
部門会報通信刊行費	100,000	100,000	0
名簿刊行費	0	120,000	120,000
封筒その他印刷費	30,000	30,000	0
教科内容学検討委報告書※3	200,000		-200,000
特別課題検討委員会費	200,000	200,000	0
支払手数料	5,000	5,000	0
通信費	5,000	5,000	0
郵送費	50,000	50,000	0
事務費	5,000	5,000	0
雑費	5,000	5,000	0
事務部業務委託費	100,000	50,000	-50,000
予備費	724,201	1,153,041	428,840
合計	1,628,201	1,927,041	

※3　教科内容学検討委員会は廃止となったため、費目立てなし

■部門総会・協議会等報告

日時：平成25年10月12日（土）9:30-11:00
会場：京都教育大学F棟　大講義室Ⅱ

＜開会式＞

1. 開会の辞　山口副代表より、全国美術部門の特色にふれる開会の辞があった。

①教員養成における美術の職能集団②各種委員会の活動③美術教育三学会の連携、以上を通じて、造形を通して子どもたちをどう輝かせるかということを目的にしている。

2. 開催大学挨拶　村田大会実行委員会委員長より、大会テーマに関する挨拶があった。岐路激動の時代、転換期の生き証人として、当事者として乗り越えて行く。

＜総会＞

1. 挨拶　大嶋代表より、全国美術部門が美術教育を支える重要な組織として、美術教育に関する調査研究及び提案を進めていく必要性にふれる挨拶があった。
2. 議長団選出　互選により、議長（九州地区）宮田洋平氏（福岡教育大学）、副議長（北陸地区）江藤望氏（金沢大学）が選出された。

3. 議事

＜報告事項＞

（1）会員登録・入会等報告

相田総務局長より、2013年10月10日時点で、全国美術部門326名、大学美術教育学会308名の登録を確認していることが報告された。

（2）特別課題検討委員会報告

小澤委員長より、テキストの骨子紹介及びテキスト化に向けた活動報告がなされた。

（3）附属学校委員会報告

天形委員長より、附属の状況についてアンケートや聞き取りによる調査を進めるなかで、図工・美術教師の減少、弱体化の傾向にあることが報告された。引き続き、附属の情報があれば寄せてほしいとの呼びかけがあった。

（4）全造連大学委員会報告

大嶋委員長より、全協美と教大協全国美術部門との連携の場を新しく組織すること、その新名称として「大学造形教育連絡協議会（案）」が挙げられ、11月の運営委員会に向け準備を進めている旨の報告があった。

（5）その他　特になし

＜協議事項＞

（1）平成25年度役員・各種委員構成・任期

大嶋代表より、役員・各種委員構成が紹介され、承認された。昨年度からの特別課題検討委員会の名称変更について確認された。

（2）平成24年度事業・決算報告

相田総務局長より、平成24年度事業・決算が報告され、承認された。

（3）平成24年度監査報告

増田幹事より、平成24年度日本教育大学協会全国美術部門の会計について、平成25年9月12日に監査委員会を開催し会計監査を実施した結果、平成24年度会計の処理及び決算が正確に執行されていたことが報告された。（資料配布あり）

（4）平成25年度事業計画（案）・予算（案）

相田総務局長より、平成25年度事業計画案及び平成25年度予算案が報告され、承認された。

（5）平成26年総会・協議会の開催大学（H26福井大学）

大嶋代表より、次回開催大学の福井大学が紹介された。浜口先生より、スタッフ3名（新年度から4名）で準備を進めていく旨の報告があった。

（6）特になし

4. 議長団解任
5. 閉会の辞

岩村美術部門副代表より、図工・美術に関する教育研究を先へと進めていく美術部門の重要な立場が確認され、閉会の辞があった。

＜協議会＞

「子どもの側からみた教科内容学」を協議題に、新関伸也氏（滋賀大学）をコーディネーターに、奥村高明氏（聖徳大学）、松本健義氏（上越教育大学）、をパネリストに、林耕史氏（群馬大学）をコメンテーターに迎え50分間行われた。教科内容学検討委員会のこれまでの経緯を踏まえ、子どもの表現と学びの意味について造詣の深いパネリスト、コメンテーターのプレゼンテーションを起点に議論を深めた。

（総務局　郡司明子ほか）

■日本教育大学協会全国美術部門 平成 25 年度事業報告

3月15日(金)　拡大総務局会・拡大理事会(役員・委員長出席)
第2回全国美術部門役員会、各種委員会(TKP東京駅八重洲カンファレンスセンター予定)
(平成25年3月)　※前年度事業「部門会報・第44号」、発送3月中旬(京都大会　予告)
4月1日(日)　日本教育大学協会への事業報告(H24.12-H25.3事業分)
〔平成25年度〕
5月31日(金)　H24論文集『日本教育大学協会研究年報』査読候補者推薦
6月9日(日)　部門運営委員会 (オフィス東京会議室)
6月中旬　全国美術部門協議会・総会ほか日程、「京都大会案内(第2次)」発送
6月中　平成24年度会計監査(増田監事・小澤監事)
8月末~9月10日　「部門会報・45号」、「京都大会案内(最終)」
9月15日(日)　部門運営委員会(東京　会場未定)
10月11日(金)　拡大総務局会・拡大理事会(役員・委員長出席)
・第1回全国美術部門役員会、各種委員会(全造連大学委員会:全美協との合同協議※H20以降、附属学校委員会、特別課題検討委員会)(京都教育大学)
10月12日(土)　全国美術部門「京都大会」開催(京都教育大学)、部門総会、部門協議会
10月13日(日)　午後、次期開催大学への引継ぎ(次期開催大学―京都教育大学)
11月28日(木)~29日(金)　第66回全国造形教育研究大会2013/東京大会
12月2日　日本教育大学協会への事業実績報告(H25.4-12分)
(平成26年)
1月24日(金)　日本教育大学協会全国研究部門連絡協議会(東京学芸大学本部)
1月25日(土)　部門運営委員会(東京学芸大学)
3月15日(土)　拡大総務局会・拡大理事会(役員・委員長出席)
第2回全国美術部門役員会、各種委員会(TKP東京・京橋)
3月中旬「部門会報・第46号」(大会予告)発行・郵送
(4月1日)　日本教育大学協会への事業報告(H25.12-H25.3事業分)

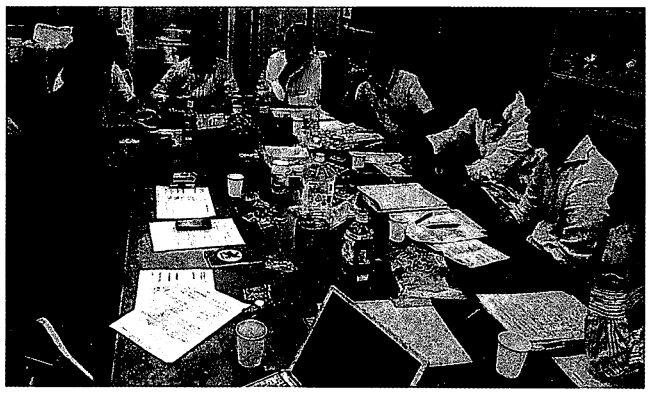
以上

■平成25年度特別課題検討委員会 報告

埼玉大学　小澤基弘

昨年度から引き続き特別課題検討委員会を本年度もほぼ毎月一回開催し、テキスト化に向けて実作業を進めている。昨年 11 月の大学美術教育学会京都大会で報告したように、本年度後半はテキスト内容の具体的執筆に入っている。「創造」という視点から教科内容を捉え章立てを行い、各章について担当の委員が執筆を目下行っているところである。特に小中の現行教科書の題材を「創造」の諸相のなかで解釈し、教師がどのような観点で教科書題材を考えればよいかを具体例として加えることで、考察にリアリティを与えるよう配慮している。できれば今年度中(25 年度中)に一つの区切りをつけ、来年度は最終年度として、大学における授業実践の検証と考察を付加していく予定である。来年度末には区切りの報告書(テキスト)の作成を目指している。

現在 11 名体制で作業を進行しているが、メンバーの殆どがいつでも参集できる距離にある関東圏の、特に教科専門の教員である。教科専門教員がこのように積極的に教科内容を考え、教員養成系大学の美術教育の在り様を考えるという機会は、これまでほとんどなかったように思う。特に 30 代、40 代が中心となっており、この若い世代の教科専門教員が、自らの表現だけではなく、美術教育についても真剣に考え取り組もうとしている姿勢を、本委員会の活動は証していると私は思う。この委員会の議論の特徴は、各委員が「俺が俺が」的な自己主張をするのではなく、自分の芸術観を一旦引いて捉えようとする冷静で客観的な姿勢にあると思う。それ故に教科教育学の委員とも等しく議論が進められているわけである。今後の教員養成系大学の美術教育を考える時、やはりその構成員の多くを占める教科専門教員の教育へのコミットメントは不可欠である。そして教科専門と教科教育との生産的な議論もまた必至である。本委員会の活動はまさしく今後の斯界の在り様の試金石となると信じている。そうした自負心を持ちながら、本年度残された時間で作業を進め果たしていくつもりである。



▲平成 25 年度委員会の一コマ

■平成25年度附属学校委員会報告

福島大学　天形　健

附属校長を経験して、附属学校園の実情を内部から見ることができました。それまで、学校公開や研究活動に参加協力して見ていた附属学校園のイメージとは、大きく異なることもありました。その多くは、学校経営に関わることや他の学校では見られない附属学校園の特色といえるものですが、全国国立大学附属学校連盟（全附連）の組織立った活動もそのひとつでした。

全附連は、大学以外の外部研究活動として附属では重要なネットワークになっていると感じたからです。

全附連の活動は、東北地区等でも地区附連として活動しています。この連盟活動では、全体会として研究活動が行われるとともに、校長や副校長部会等に分かれて協議が行われ、各地区や附属学校園の情報交換や研究発表会が行われています。

もうひとつは、各都道府県内の教科教育研究会の事務局が附属学校に置かれている場合が多いということです。また、初任者研修や講師研修を引き受けている附属学校も少なくないと思われます。

附属学校委員会として、そういった多忙な環境の中にいる図工・美術科教員との協力関係や支援のあり方は、とても困難なものがあります。教員数が少ないにもかかわらず、附属学校の教員は教育研究をすすめ、全国・地区大会で研究発表を行いながら恒例となっている学校公開を通して地域貢献を果たしているのです。一方で、附属学校園教員ＯＢたちが、一般学校に戻ってから、教科研究や学校運営に多大な影響を与え、学校教育改善に貢献しているとも言われます。

教員採用が少なくなっている地方では、附属学校教員の選出に苦労していると聞きますが、附属学校園では日々の授業や生活指導、そして教育実習等を丁寧にこなしながら、附属学校としての役割を充分に果たしている実態がありました。ただ、いくつかの附属の図工・美術科の教員との会話等から、教大協美術部門、大学美術教育学会の存在意識が希薄であることを感じました。今後、これまで以上に、美術部門から附属学校園への働きかけが必要であるという課題が見えてきました。

〔平成25年度委員〕

委員長　天形　健（福島大学　24-25）
副委員長　伊藤　文彦（静岡大学　24-25）
委　員　佐藤　昌彦（北海道教育大学　24-25）
委　員　片野　一（福島大学　24-25）
委　員　遠藤　敏明（秋田大学　25-26）

■平成25年度日本教育大学協会全国美術部門協議会地区会報告

◆北海道地区

日時：平成25年10月2日（火）12:20～12:55
会場：北海道教育大学テレビ会議システムを利用した札幌，旭川，釧路，岩見沢の各キャンパス
参加者：佐藤、花輪（札幌校）、南部、名達、大石（旭川校）、坂巻、阿部、三橋、前田（岩見沢校）、佐々木、福江（釧路校）

議題

1. 加入状況及び会員の動静確認
平成25年度の着任教員，加入状況等を確認した。

2. 地区委員及び地区理事の選出
佐々木宰地区委員（地区理事）の任期が平成25年度末で満了するため，後任として佐藤昌彦氏（札幌校、平成26～27年度）の着任を確認した。なお、平成25～26年度任期の坂巻正美地区委員（地区理事）の後任予定（平成27～28年度）は三橋純予氏（岩見沢校）であることを確認した。

3. 学会開催に関する「北海道・東北ブロック」ローテーション
5年に1回のローテーションを、北海道地区と東北地区で交互に引き受ける。それぞれの地区にとっては、10年に1回開催が回ってくる計算となる。ブロックへ制移行した背景については、東北地区会員にあらためて認識を促す。開催に関する負担とその均衡化については、継続して相互理解を図る。以上のことを確認した。

4. 平成28年度学会開催
平成28年度の「北海道・東北ブロック」での開催を、北海道教育大学が引き受ける。開催地を札幌市とし、運営にあたっては地区の全会員が協力するものとする。

（佐々木宰／北海道教育大学釧路校）

◆中国地区定例総会　報告

下記要領で定例総会を開催いたしました。

日時：平成25年6月22日（土）、14：00～

会場：岡山大学教育学部・東棟3階／1306教室

〈日程〉

・14：00～14：45　研究発表

・15：00～16：30　総会

〈総会次第〉

1．開会の挨拶（当番大学代表）

2．出席者自己紹介

3．地区理事交代挨拶

4．議長選出

5．報告・協議事項

（1）全国委員会、理事会報告

（2）平成24年度地区会計報告

（3）平成24年度会計監査報告

（4）協議

（5）情報交換

（6）連絡等、その他

（7）次期定例総会当番大学挨拶（島根大学）

総会に先立ち、岡山大学の山本和史准教授（木材工芸）の研究発表（白漆の研究）が行われ、質疑応答があった。

続いての総会は、総会次第にそって行われた。

報告・協議では、地区定例総会の参加費について、今まで大学毎にだしていた領収書を、個人名にできないか、という提案があり、問題ないということで、今年度よりそのようにすることとなった。また、総会に活気がなくなっているように思われるので、総会の在り方や内容について検討してはどうか、という意見が出され、継続協議とした。

情報交換では、教職実践演習について報告が行われた。各大学とも試行錯誤の段階であることが共通しており、続けて情報交換をしていこうということとなった。

各大学の事情で参加者が少なかったことが多少残念であった。

（橋ヶ谷佳正／岡山大学）

◆四国地区　地区会報告

日時：平成25年7月6日（土）　12:00～14:30

場所：香川大学　幸町北2号館　美術教育理論資料室

出席：愛媛大学―福井一真

高知大学―金子宜正

鳴門教育大学―山田芳明

香川大学―安東恭一郎，古草敦史

（計5名）

○報告・協議事項

1）拡大理事会・部門協議役員会報告について

本年度四国地区理事（古草）より，平成25年3月15日に開催された拡大理事会・部門協議役員会の報告が行われた。

・学会誌報告・・・論文投稿に際しての著作権の問題についての意見交換

・今年度京都大会参加について・・・近畿・四国地区としての協力確認

・学生会員の登録のあり方について・・・2年間限定としてはという提案等

2）会計等引き継ぎと支部会会員動向について

・会計等の引き継ぎ確認と完了

・会員数1名となった大学の問題についての意見交換

各大学とも会員数は減少傾向である。今後も引き続き，異動等で着任された教員には本会の意義や役割等の理解をはかり，入会を勧める取り組みを行うことが共通認識された。また，退会された教員等には再度、入会を勧めたいとの意見も出された。

3）各大学の動向等について

・各大学の学部，大学院の学生数動向（受験生数，入学選抜時の倍率等）や教員採用試験の受験意欲等の学生の質に関わることの意見交換

・福井一真先生から愛媛大学の卒業・修了制作展や愛媛大学と山形大学との連携，東京田町・キャンパスイノベーションセンターでの展覧会等の取り組みについての報告

（古草敦史／香川大学）

■ 2014 年 福井大会のお知らせ

第 53 回大学美術教育学会・福井大会
平成 26 年度日本教育大学協会全国美術部門総会・協議会の開催の一次案内

教大協美術部門・大学美術教育学会全国大会委員長
福井大学教育地域科学部教授　　宮崎 光二

第 53 回大学美術教育学会（福井大会）並びに平成 26 年度日本教育大学協会全国美術部門総会・協議会を福井大学で開催いたします。これまでの美術教育を真摯に振り返りつつ、これからの美術教育の活路について積極的な教育研究・協議がなされる大会にしたいと思っています。どうか、下記の日程に合わせて、研究発表・大会参加へのご準備をよろしくお願い申し上げます。

■開催日 :2014 年 10 月 4 日（土）、5 日（日）
　※ 3 日（金）事前各種会議日
■会　場 : 福井大学（福井大学文教キャンパス）
　　総合研究棟 V（教育系 1 号館）
　　福井県福井市文京 3 丁目 9-1
■テーマ :「教えること・育てること - 美術教育の原点を問い直す」
■内　容 : 総会、研究発表（口頭発表、ポスター発表、ポスター展示）、企画行事、懇親会など

企画・運営 : 第 53 回大学美術教育学会福井大会事務局
主催 : 大学美術教育学会
　※共催、後援等については申請中です。

正解のない課題から知を創造し、表現し共有化する社会である知識基盤社会に突入したと言われる今の時代、子どもたちにも、他者と協働しながら複雑な現象に対し情報の収集・分析・判断を行い、実行した結果を社会に問うていくといったグローバルスタンダードの能力が求められるようになりました。自ら課題を見つけ自ら学び自ら考える力を提起した文部科学省の「生きる力」、前に踏み出す力・考え抜く力・チームで働く力の必要性を唱えた経済産業省の「社会人基礎力」、社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力・人間関係形成能力・自律的に行動する能力を求める OECD の「キー・コンピテンシー」など、いずれもどのようなグローバルスタンダードの能力を要請しているかが伺えます。

福井大会では、多様な立場の参加者と共に考えていくことができるような「問い」を立て、様々な対話や議論が生まれる「広場（シンポジウム・ポスターセッション・学生会議等）」を創り出したいと思います。そのために、教育の原点である「教えること」「育てること」について、それぞれの立場から語り合えるような対話を生み出すキーワード（遊び・心・身体等）を精選することを核に据えながら、準備にとりかかっているところです。リアリティをもった美術教育の中にある「教えること」「育てること」を捉えなおし、それらが異なる文化や人の受容を踏まえた創造性を求めるグローバルスタンダードとどのように連動していくのかを表明し、さらには大学の教員養成を含む教育現場の自律性の意義を確認していきたいと考えています。

どうか、福井大会にふるってご参加いただけますようお願い申し上げます。皆様からの貴重なご研究やご提言をいただくとともに、それぞれの「広場」において新たな指針を生み出すことができれば、開催大学として喜びこれに勝るものはありません。是非、本大会日程を押さえていただきますようお願い申し上げます。

◆前　　日　平成 26 年 10 月 3 日（金）
拡大理事会、各委員会、美術部門協議役員会等

◆第 1 日目　平成 26 年 10 月 4 日（土）
①学会・部門受付（9 時以降の予定）
②日本教育大学協会全国美術部門 開会式
　第 52 回大学美術教育学会全国大会 開会式
③日本教育大学協会全国美術部門協議会
④研究発表Ⅰ・Ⅱ（11 時以降の予定）
⑤ポスターセッション（ポスター発表・ポスター展示）
⑥懇親会（福井大学アカデミーホール）

○美術部門協議会
* 日本教育大学協会全国美術部門協議会のテーマ
　「教科専門から教科教育へのアプローチ」（仮）
* 大嶋彰（滋賀大）と白井嘉尚（静大）の発表・討論

◆第 2 日目　平成 26 年 10 月 5 日（日）
①学会・部門受付（9 時以降の予定）
②研究発表Ⅲ（9 時 30 分以降の予定）
③全国学生会議
④日本教育大学協会全国美術部門総会 / 総会大学美術教育学会総会
⑤企画「美術・遊び・大人⇔世界（共同体）」
⑥研究発表Ⅳ（14 時以降の予定）
※日程（研究発表、企画）については調整中です。

《開催の主旨》　美術・遊び・大人⇔世界（共同体）

「美術教育」という言葉を基本的な要素に分解してみると、「美術」、「教える」、「育つ」という 3 つの言葉が導き出されるのだが、これらが最終的に目標とするところを、端的に「世界（共同体）」への参画、参入にあると考える。美術の表現行為とそれを取り巻く様々な現象は、この為の独特な方法であると捉える視点をまずおいてみたい。そして、その為の媒体や触媒として、特に「遊び」という考え方をここに加えてみたい。

「遊び」には様々な意味が含まれるが、先ず自由な発想が自在に動き始める無色の場所を想像している。議論があらかじめなんらかの色に染められているところで、いくら表面的には活発に展開したとしても、ある水準を超えることはないし、果たしてそこでいか程の成果を期待することができるだろうか。又、「遊び」には、有用であるとか、有益であるという、時に固執ともなりかねない意識から一旦距離を置くことが含意されている。いわば不真面目で無責任な態度を推奨はしないが、許容されるものとしてとらえ、常識というものを瞬間でもいいから転倒させることを、言葉は悪いが意図している。逆に言えば、今はそのようなことが真剣に必要とされる状況だとも言えるだろう。そして「遊び」が美術の本質に深くつながっていることは疑いのないことであって、「遊び」でない美術活動などはそれこそ異常な行為でしかない。更に「遊び」は「教える」ことと「育つ」ということとも強く関連付けられている。心や精神が他者や事物と豊かな関係性を構築するためには、その内側に隙間を保っておく必要がある。場所というと誤解を招くかもしれないが、自身を能動的に動かす為の心理的空間ととらえてもいいだろう。そしてこれら複数の意味を含んだ「遊び」が「世界（共同体）」を作り上げる原動力となることを考えている。「想像する力」が働く場所であり、「創造力」が発現する舞台でもある。

さて、「世界（共同体）」のなかの一員として責任を果たすことのなかには様々な側面があることが想像される。「育つ」ということのなかには、とりわけ「大人」になることが必須のこととして求められるし、そのなかでの社会的義務を自問することから「世界（共同体）」に対して、一人ひとりが独自の貢献をしなければばらない。「公共性」や「市民意識」といったことにも当然関心を持たなければならないし、それは大人としての義務でもある。この為には、個人と「世界（共同体）」が相互に相手を包摂するという構造が考察されなければならないし、そこで私達は、「美術」という営為が何であるか、又、何を成し得るかということを探らなければならない。そして、これらのことを、学校教育のなかの「美術教育」ということに留めず、教育という、より大きな枠組みからの視点を通して明らかにし、私たちが示す知見として一般に提議する義務と責任があると考えるべきである。又、これに加えて、私たちは「美術」という表現そのものに対しても責任を課せられている。「美術」を学ぶうえでの基礎的な知識の獲得や、その為の修練という視点をなおざりにすることは出来ない。多くの貴重な才能が適切な助言と指導もなくあたら失われてしまったという思いを拭うことは出来ない。

ここで「教える」ということにも簡単に言及しておかなければならないだろう。一般論として「美術」を教えるという事で言えば、様々な教材の開発や、継続的な指導法の研究など、豊富な事例と共にいかにも充実しているという印象を持っている。当然「美術教育」の１つの核でありその背景でもあるが、それが冷静な批評を伴わずに、自己目的化してしまうのでは、本質を損なうことになりかねない、ここで詳細を論じることはできないが「教える」ということには、常に「教えることは可能か」という言葉を置いておかなければならない。「教える」ことの危険性を認識していなければ、そもそも「育つ」ということが危うくなってしまう。

さて「美術教育」が置かれている状況は、とても厳しいものがあると巷間では言われているし、それを否定するものではないが、果たしてその厳しさの正確な実態は本当に理解されているのだろうか。学校教育（中・高）における「美術」の時間数の減少と美術専任教員の削減といった具体的な問題は見えているが、それを招いた複合的な原因が問われることは稀なことのように思われる、しかし、ここを１段も２段も探らなければ何も見えてこないことは明らかなことであって、逆に、危機の正確な把握から、「美術教育」の本質とその確固とした基盤を再構築する貴重な契機を見出すことが想像されてもいいのではないだろうか。そのなかで、例えば「情報」と「身体」の在り様の大変化は、顕著なこととして、根本的で緊急な課題の１つだと考えていいだろう。美術という営為がここで果たすべき役割と能力は決して軽いものではないし、社会に対して特に大きな責任が問われていることは厳に意識しておかねばならない。今の情況は、いわば期待が逸らされていることに対しての苛立ちの表れであるという事を考えていいのではないだろうか。

様々な意味で時間的な余裕がさほど残されているとは思われない。美術に携わる私たちの真摯で持続的な議論のなかから、力強く可能性を持ったヴィジョンが立ち上がらなければならないだろう。今回開催される福井大会が、その始まりの一歩となることを願って開催の主旨としたい。

□アクセス・鉄道 / えちぜん鉄道福井駅 -（約 10 分）- 福大前西福井駅［JR 福井駅東口から出て三国芦原線に乗車］
・バス /JR 福井駅 -（約 10 分）- 福井大学前停留所［JR 福井駅西口から出て市内バス乗り場 10 番より乗車］
・タクシー /JR 福井駅 -（約 10 分）- 福井大学文京キャンパス［必ず「福井大学文京キャンパス」と伝えてください。］
・自家用車 / 北陸自動車道 福井北 I.C から国道 416 号線で西へ約 7km または福井 I.C から国道 158 号線で西へ約 8km

■問い合わせ先
福井大会運営委員長　宮崎光二
Tel&Fax　0776-27-8702
E-mail　kmiyazak@f-edu.u-fukui.ac.jp

■平成25年度第2回全国美術部門協議役員会　報告

日時：平成26年3月15日（金）16：00～16：45
会場：ＴＫＰ東京駅京橋ビジネスセンター
Ⅰ．挨拶
・開会の辞（山口　副代表）
・代表挨拶（大嶋　代表）
Ⅱ．報告・協議
◎報告事項
(1) H25年度部門会員・事業等　報告（総務局）
(2) 各種委員会報告
　・附属学校委員会
　・特別課題検討委員会（小澤　委員長）
　・大学造形教育連絡協議会（全造連大学委員会）
◎協議事項
(1) H26年度学会「福井大会」（総会・研究発表等）
(2) H26年度事業計画・予算（案）（代表）
(3) H26年度人事案・引継ぎ
・閉会の辞（岩村　副代表）

▲ー大嶋彰代表をかこんで終了後の記念撮影ー

■事務部より

1.　未納会費がある方へ

会員管理をアウトソーシングするにあたり、スムーズな引き継ぎをさせていただくために、未納会費のある方には通知いたしますので、速やかに納入いただけますようお願いいたします。

2.　会員個人情報の変更

同様に個人情報に変更があった場合は、速やかにご連絡下さい。

【総務局】
・相田隆司（東京学芸大学）「第46号」担当
・大泉義一（横浜国立大学）
・大成哲雄（聖徳大学）
・郡司明子（群馬大学）
・新野貴則（山梨大学）
・芳賀正之（静岡大学）
・松尾大介（上越教育大学）
・山田一美（東京学芸大学）